

### 必勝祈願 星野阪神タイガース



毎年三月になると、近所のタイガースファンから「今年はいつ？」と聞かれます。「タイガースの必勝祈願は」という主語が抜けてもこの時期の恒例行事といえは「今年は〇〇日ですよ」とすぐに答えられます。球春を間近に控えた三月二十五日午前九時三十分、境内に



「六甲おろし」が鳴り渡るなか、阪神球団役員を始め、猛虎ファン待望の闘将星野監督率いる選手達が参拝に訪れました。なかでも、今年こそ優勝を担うべく阪神タイガースに焦がれて入団したあの金本が、伊良部が、下柳に野口が縦縞のユニホームを纏い、井川、濱中等のナインに混じり祝詞を聞き入る様に、ああ、今年は優勝戦線に絡むのは無論のこと、それ以上の結果を膨らませてくれるムードを選手達の後ろで見ていた多数のファン等も感じ取っていたのではないのでしょうか。



### 社務日記 マイクロフィルム・デジタル化に際して

当社に残されている元禄七年(二六九四)よりの社務日記および二〇〇冊をこの度マイクロフィルム及びデジタル化する事となりました。マイクロフィルム・デジタル化することにより瞬時に年月による検索が行えるようになり保存、管理はもろんのこと多方面での有用な資料となることと致ししょう。



### 阪神西宮駅に 「エビスタ西宮」誕生



三月十八日、阪神電鉄西宮駅に新しいショッピングゾーン「エビスタ西宮」が誕生しました。核テナントとして阪神百貨店が入居するほか、物販や飲食の専門店が構成され、阪神間の新しいスポットとして賑わうことと致ししょう。「エビスタ西宮」は地上二階建てで当社の地元と言う事にちなんで命名されたそうです。

### 夏越しの大祓

知らず知らずのうち身に付いた穢れを六月と十二月の末に行われる大祓式で祓い清め、厄難を避けます。六月の大祓式は、「夏越しの大祓」ともいわれ、暑い夏を越すために欠くことのできないものです。人形に氏名と年齢を記入され、所定の作法で厄をお移し下さい。六月三十日までに入形をご返納頂ければ、大祓式でお祓いを致します。



### 講社のご案内

阪神間の中心地・西宮にありながら緑深いえびすの森に鎮まる西宮神社は、福の神祇本社として古来より親しまれてきました。その御神徳は、全国津々浦々にまで広がり、各地で「えびす講」が作られてきました。当社では、これらをまとめ、どなた様でも入っていただける「日供講社」と「本えびす講社」として運営を致しております。日供講社 神前に朝夕のお供えとお誕生日にご祈禱を致します。講全年額 五、〇〇〇円 本えびす講社 西宮神社の崇敬会、議員の皆様の日頃の守護を致します。講全年額 正議員 一、〇〇〇円より 梅議員 五、〇〇〇円 竹議員 一〇、〇〇〇円 松議員 三〇、〇〇〇円

INFORMATION  
お知らせ

### 編集室から

今号表紙の絵柄は、江戸時代に編纂された当社の年中行事を絵巻物で綴った「西宮大神本紀」の図をもとにイメージ作成したものです。



約四〇〇年前に途絶えていた祭典が復興再現できたのは、「西宮大神本紀」などの記述が継承されてきた影響が大きいのでしょうか。それと同じように連綿と書き綴られ、所蔵されてきた社務日記を見つめなおすことで、今の世に忘れられた何か新しい発見や今後に資するものがきっとあることと致ししょう。(希)

# えびす



えびす  
平成15年 夏号

西宮えびす平成15年夏号(通巻第19号) 平成15年6月1日発行  
発行/西宮神社 〒662-0974 兵庫県西宮市社家町1-1-7 TEL0798-330321 FAX0798-331500

編集/総務課広報 印刷/小西印刷所

平成15年  
夏号

# まつりの賑わい

夏の風物詩として、今年も各地でお祭りがとくさんになろう。しかし、神社のまつりから広く商店街の大売出しにいたる「○○まつり」と名のつくようなものまで含めると、その数の多いのに驚く他はない。これからのまつりは「まつり」の用語の氾濫とともに、神の存在しないまつりも生れてくるだろうが、短時日に消滅する事実を考えてみなくてはならない。新しい時代に対処してゆくには、まつりの意義とか精神とかは、それ自体の中だけに求めるべきでなく、さらに広い視野のもとに、まつり、人づくりにつながるその波及効果こそが注目されなければならないと思う。それには若者の理解と力が必要であることは、うまでもない。

## 西宮まつり

### 9月21日 宵宮祭

西宮まつりの開催を奉告し、ご例祭の無事斎行を祈願する宵宮祭が行われた後、各地区で作った三十二基にもぼる子供樽みこし・西宮神社氏子青年若戎会のだんじりが浜脇中学校のプラスチック・バントアラリーを先頭として西宮中央商店街を中心に西宮神社周辺を元気に練り歩きます。

- 宵宮祭 ————— 午後五時
- 子どもみこし ————— 午後五時三十分



子ども樽みこし

### 9月22日 西宮神社例祭

午前十時より本殿にて古式に則り厳肅裡に例祭が斎行され、午後からは神社周辺を稚児行列やだんじりが巡行。夕刻には境内特設ステージに於いて演芸の奉納等、趣向を凝らした様々な神賑行事が行なわれます。

- 例祭 ————— 午前十時
- 稚児行列 ————— 午後二時
- だんじり巡行 ————— 午後四時
- 奉納演芸 ————— 午後六時



十二単衣をまとった八乙女



町内を練り歩くみこし行列

### 9月23日 みこし渡御

みこしに神様をお遷しし、童男・八乙女・供奉行列と共に午前中は神社周辺を巡幸する陸渡御が、午後は新西宮ヨットハーバーから飾り船に乗り、海上を巡幸する船渡御が行なわれます。平成十四年より和田岬の和田神社と三石神社への産宮参りが行なわれる様になりました。

- 発輿祭 ————— 午前十時
- お旅所祭 ————— 午後十二時二十分
- 出港 ————— 午後二時
- 入港 ————— 午後三時三十分
- 還御祭 ————— 午後四時半



雄壮に連なる海上渡御

風祭斎行



西宮神社宮司 吉井 良隆



午前十時から夏祭りが本殿で斎行され、引き続き拝殿にて巫女による暑気払いの湯立神楽が奉納されます。

午後六時半よりえびす萬燈籠点灯式が斎行されます。神職から二神火がハッピー姿の西宮神社氏子青年若戎会の会員や氏子町内の子供会の方々に手渡され、境内外の石燈籠約三百基をはじめとしてローソク燈籠二万個あまりに点火され、



## 夏祭



夏祭りの賑わいと共に夜の境内を美しく、そして神秘的な世界につくりあげます。



拝殿前の特設舞台では、神賑行事として世界各地で講演を重ねられている女人舞楽・原筈会により舞楽が奉納されます。これまで男性によって舞われていた舞楽を渡来の原点に返り、女性による華麗な舞いの再興をめざして昭和六十年に原筈会を発足されました。正当な舞楽の伝承・発展を願い、神社でのご奉納、世界各地での公演を重ねる傍ら、継承者の養成、装束製作の技術修得なども行っています。



原筈会主宰 原 笠子さん

# 諸国講社の今昔

全国に広がる「諸国講社」。  
歴史の移り行く様子を分布状況を交えながらご紹介いたします。



## 諸国講社について

当社のご祭神であるえびす様は、福の神様として、鎌倉・室町時代には文献や謡曲、狂言に語られ、全国の崇敬の方々におまつりされてきました。

これらの由緒によりまして、江戸時代の寛文三年(一六六三)に四代將軍徳川家綱公がご造営された社殿の維持修葺料にあてるために、古来より発行されてきた御神像札に版権が許可され、独占的に頒布することが認められました。

年毎に社勢は、東山道、東海道、北陸方面また遠く東北地方にまで普及し、多数の崇敬者があつたことを窺い知ることができます。

千七百年代の元文・寛保・宝暦・明和年代の本社神主家発行の免許

状を先祖より受け継がれ、今日に至るまで配札を続けておられる方もあります。

明治維新を迎え幕藩体制が変革し、従来の方法での配札が困難ななつてきましたので、全国各地の配札人、崇敬者からの要望により、明治十二年に内務省認可の西宮神社教院が本社に、西宮教会地方本部、講社事務取扱所が各地に設置されました。明治十六年には、神社付属の西宮講社として改組され、社用係を通じて、本社より奉送する御神影札を頒布するという現在の諸国講社の制度が整いました。

明治二十年以降、各地で御分霊奉斎の気運が高まり、明治二十八年岐阜県中津川西宮神社が、明治三十四年には群馬県桐生西宮神社などが建立されました。分霊の条件として、神符の本社よりの申し受けが行われ、本社直授の御神影札を祭礼日に社頭でも広く頒布されるようになりました。

明治二十四年には内務省登録九一八〇号をもって版権を再び得、透かし入りの特別の御神影札として今日に至るまで全国に頒布しています。

## 江戸期

### 当時の分布状況

- ◆ 出羽(山形県) 新庄・左沢・東根・上山・米沢
- ◆ 越後(新潟県) 村上・水原・浦佐・十日町・相川
- ◆ 陸奥(岩手県) 水沢・前沢・二関・金ヶ崎・大原
- ◆ 陸奥(宮城県) 気仙沼・石巻・金成・丸森・川崎
- ◆ 陸奥(福島県) 二本松・須賀川・白河・東郷・会津
- ◆ 信濃(長野県) 浦野・松本・飯田・中野・赤沼
- ◆ 上野(群馬県) 下野(栃木県) 大田原・福原・氏家・宇都宮・沼田
- ◆ 常陸(茨城県) 潮来・江戸崎・玉造・水戸・真壁
- ◆ 武蔵(東京都) 埼玉(埼玉県) 久喜・与野・越谷・横山町・馬喰町
- ◆ 相模(神奈川県) 菊名・平塚・鶴岡・小田原・三浦半島
- ◆ 遠江(駿河・伊豆・静岡) 白須賀・舞阪・見付・清水・小路・坂腰・新家
- ◆ 下総(上総・安房・千葉) 八口市場・若白毛・長和田・東條・給田
- ◆ 尾張(三河(愛知県)) 吉田・知多・愛知羽(豊楽・中嶋郡)
- ◆ 美濃(岐阜県) 武儀(加茂郡)



江戸時代の御神影札

\*寛政二年(一七九〇)十一月に寺社奉行所に提出した西宮支配下関東筋人別帳による

武蔵国 12人	信濃国 41人	常陸国 77人
相模国 12人	上総国 70人	出羽国 41人
駿河国 4人	下総国 41人	陸奥国 95人
安房国 22人	上野国 5人	越後国 19人
甲斐国 6人	下野国 34人	

合計479人が記されています。

## 明治以降

### 現在の分布状況・特徴

明治時代には、神奈川県や千葉県などでも多くの御神影札を配札していましたが、現在では、東海道は静岡県清水まで、東山道は長野県から群馬県の一部にかけて古くからの配札形態を残す新潟県と山形県が中心になっています。

配札方法も江戸時代から続く配札人が軒をつつ戸別訪問するところから神社の総代や自治会長・区長を通じての配札、部落毎での取り纏めや神社社頭での頒布とさまざまではありますが、年間五十万枚をこえる御神影札が本社より奉送されています。



現在の御神影札 明治24年以降の御神影札(すかし入り) 明治初期の御神影札

### 御神影札1万枚以上授与

- 山形県 長井市 総宮神社
- 山形県 米沢市 白子神社
- 山形県 西置賜郡 遠藤 胤陸
- 新潟県 北蒲原郡 萩原 重雄
- 新潟県 北魚沼郡 仲丸 宣弘
- 新潟県 佐渡郡 西宮神社佐渡講社
- 新潟県 十日町市 十日町西宮神社
- 長野県 松本市 西宮講社松本事務所
- 長野県 上田市 上田大神社
- 岐阜県 中津川市 中津川西宮神社
- 静岡県 焼津市 焼津西宮神社
- 静岡県 榛原郡 大井神社
- 静岡県 小笠郡 三浦 司
- 静岡県 掛川市 小高神社
- 静岡県 周智郡 山本 敏雄
- 群馬県 沼田市 沼田西宮神社
- 群馬県 桐生市 桐生西宮神社
- 長野県 松本市 西宮講社松本事務所
- 岐阜県 中津川市 中津川西宮神社
- 静岡県 焼津市 焼津西宮神社
- 静岡県 榛原郡 大井神社
- 静岡県 小笠郡 三浦 司
- 静岡県 掛川市 小高神社
- 静岡県 周智郡 山本 敏雄
- 群馬県 沼田市 沼田西宮神社
- 群馬県 桐生市 桐生西宮神社

- 諸国講社数
- ◆ 20以上
  - ◆ 10~19
  - ◆ 1~9
- 山形県(10) 愛知県(5)  
宮城県(3) 岐阜県(9)  
福島県(2) 京都府(1)  
新潟県(15) 大阪府(2)  
福井県(1) 兵庫県(20)  
群馬県(4) 和歌山県(1)  
長野県(46) 佐賀県(1)  
静岡県(14) 鹿児島県(2)
- 以上 137社

## 諸国探訪

### 関東一社 桐生西宮神社

(群馬県桐生市宮本町鎮座)

桐生西宮神社は、本社直系分社として、明治二十四年十月、桐生ヶ岡公園に接する延喜式内社・美和神社の境内に御祭神・大物主命(たいこくぬす)の相殿神・同格主祭神として分霊勧請されました。当社を関東社と称するのは、関東地方においてえびす様の御祭神を蛭子大神とするのは当社だけで、他は事代主命をおまつりした神社であることから区別する意味が込められています。

織物の町桐生とえびす信仰の関わりは古く、江戸時代には農家や商家での通俗的なえびす講の行事やえびす講前市が開かれていました。明治に入ると西宮本社代参講が組織され、織物取引を兼ねた西宮参りが盛んに行なわれるようになりました。



本年町三丁目一帯で大火があり、これを契機に禍から福に転じる象徴としてえびす様の分霊を勧請する気運が高まりました。発起人九十六名を含む桐生町人約四百名の連名で「西宮分社建設願」が出され、寄付が募られ社殿が建立されました。

信仰護持のため、隣接県や県内遠方には、十人組で二人の代参講が、桐生町内や近隣には一人講を積極的に組織し、本社直授の御神札を「火防さん」と呼び、目にする度に火の用心を心掛け、御神影札を「福の神」と呼んで、日々の仕事の励みとしてきました。

現在も小野田総務を中心に二十人の世話人で神社の運営を行っており、奇しくも平成十二年(二〇〇〇)には、御分霊遷宮百年の佳節を迎え、記念事業として社号標柱の設置、記念誌の作成を行ないました。

先人からの遺訓である「街中にえびす顔が溢れるえびす講によつてのみ神社の存在価値に値する」という教えを肝に命じ、二十一世紀と共に次ぎの二百年祭に向けて納得頂ける新たな企画を提案しつつ、世話人同神明に奉仕させて頂きます。



## 桐生えびす講 【11月19日・20日】

上州に初冬の訪れを告げる桐生西宮神社の秋季大祭。歩行者天国となった神社周辺の参道には500軒以上の露店がずらり。不景気を吹き飛ばして「福」をかき込む縁起物の熊手やお宝を求め30万人以上の参拝者で賑わいます。



★祭礼期間中は、ホームページでお祭りの様子を生中継でご覧頂けます。

※ 桐生西宮神社のホームページ <http://www.kiryu.co.jp/nishinomiya/>



大矢 悦子さん

今から十五年前、  
当社福笹授与所にて巫女奉仕をされ、  
当時の経験や現在の心境などをつづった  
エッセー「福娘その後」が  
産経新聞「夕焼けエッセー」に掲載されました。  
そこで大矢悦子さんにお話を伺いました。

今回投稿は初めてで、えっちゃんに行ったら  
わけも無く書きたくになりました。今の気持ち  
を「かく」ということで形にし、誰かに伝え  
られたらすべての物事がうまく行くような  
気がしました。実際書いてみるととても気持ち  
がすっきりしました。



また、産経新聞「夕  
焼けエッセー」月間  
賞にも選ばれてびっ  
くり。嬉し恥ずかし  
といったところです。  
新聞を見て昔の友  
人から電話があった  
り、思いがけないお  
まけつきでした。

産経新聞掲載：「夕焼けエッセー」より全文抜粋  
(平成15年1月20日・夕刊)

# 福娘その後



一月十日、十五年ぶりに十日戎で賑わう  
西宮神社へ行った。  
実は以前、福娘として三日間をこの神社で  
過ごしたが当時は京都の学生で、春から大  
阪で働くことになっており、それ以降、神社  
を訪れることはなかった。

まじめに努力はするものの、折からの不  
況で客足は思うように伸びず、借金も増  
える一方。そうなる中、こころばかりにえ  
べっちゃんへ頼みである。

前は福娘として、どちらかといえば客  
観的に押し寄せる参拝の人々を見ていた。

三カ月後から始まる新社会  
人生活と、その後訪れるで

あろうはずの幸せな家庭生  
活に甘い期待を持ちつつ、「あ  
んたが福をくれそうだから」  
というおばさんに笑顔で  
福笹を渡したりしていた。

しかし、今回は間違いなく  
最も真剣な参拝者の一人。お  
祓いを受け、賽銭を投げ、願  
うは「商売繁盛」。そしてか

つて私の座っていた席にいた平成十五年の  
福娘から福笹を買った。

私は今、社会へ出て世間の厳しさを学び、  
世の中渡っていくのは本当に甘くないと痛  
感している。でも私、福娘だったんだから、  
えっちゃんもちょっとは思い出して、ええよ  
うにして下さらないかしら。

サラリーマンの家庭に育ち、商売  
繁盛より良縁祈願に関心が高か  
ったのも御無沙汰の理由である。

あれから十五年、会社を三つ変わり、海外  
留学するなど勝手気ままに過ごした末に、  
去年、レストランを経営し始めたばかりの  
彼と結婚し、尼崎へきた。

## 兵庫津 太々御神楽講への勧進

抑西宮恵美酒大神と崇奉願ハ伊弉諾伊弉册二尊第三の御子蛭子尊尔て  
おはしまして日本一酈土徳の大福神也 夫大古五行水火木金能親たる故  
万物生々する本之土乃徳を備へ御守護満々ます大祖の大神尔て所謂土農  
工商獵漁に至まで福寿円満海上安全能長久を授與志たまふ御神徳普く  
諸人信仰の輩ハ判然たり 猶御神験を祈らむ尔は神楽を奏し奉祭に志  
くハなりとそ故にこたひ永代無遍太々御神楽執行堂たく□記世話方□て  
大講の志願たり候依之當御津一国家業繁栄子孫長久海上安全能御祈禱  
のため御加講頼入の勧進を希而已



帳之奥江

兵庫津 世話人

- 西宮世話人
- 辨屋吉右衛門 瓶子や又左衛門
- 娘路屋甚太郎 小上馬伊八
- 松井源助 當金久右衛門
- 雜屋屋六兵衛 瀧屋卯兵衛
- 八馬喜兵衛

これは文政九（1826）年に西宮の年貢を始めとして主だった氏子の方々が、兵庫津（神戸）で米屋  
仲、干鯛仲などの諸人に対し、西宮社での太々神楽祭の齋行にあたって「兵庫津御太々神楽講」への入講  
を勧進する書である。兵庫津と西宮を中心とした諸業繁栄の地であり、明和六（1769）年にと  
もに天領となった。これより前の正徳年間（1711〜1715）には既に当社より兵庫津へは正月の御  
祈禱札や御像札が届けられており、この明和年間よりそれが恒例行事となっていたようだ。また安永四  
（1775）年には「兵庫津講中への年札」と講も組織されていた。この他にも文化五（1808）年に  
は「兵庫津塩物問屋山田屋茂左衛門方」へ当社御掛鯛并正月中の御膳の御魚の調進を依頼している。こ  
の加講勧進の書が出された前年には、二十二年目毎の御開帳が賑々しく執り行われ社勢も大いに盛りがつ  
た時期であった。江戸には江戸に在る西宮出身者を中核とした魚問屋、酒問屋により構成された江戸太々  
神楽講が組織されており、東西の太々神楽講が江戸期のえびす信仰に果たした役割は看過できない。西宮  
世話人としてその名が挙げられている九名の氏子の方々もまさに西宮の町方濱方一体となった氏子の熱心な  
勧進、その行動力がえびす信仰の原動力の一つであったといえよう。そしてこの時期の兵庫津と西宮との結  
つきが、平成の世の海上渡御祭（西宮まつり）再興として結実したのである。

